

沼津市 若山 牧水 記念館

第16號

1996. 3. 15.

編集・発行 社団法人 沼津牧水会
〒410 沼津市千本郷林1907-11

Tel(0559) 62-0424
Fax(0559) 62-0424

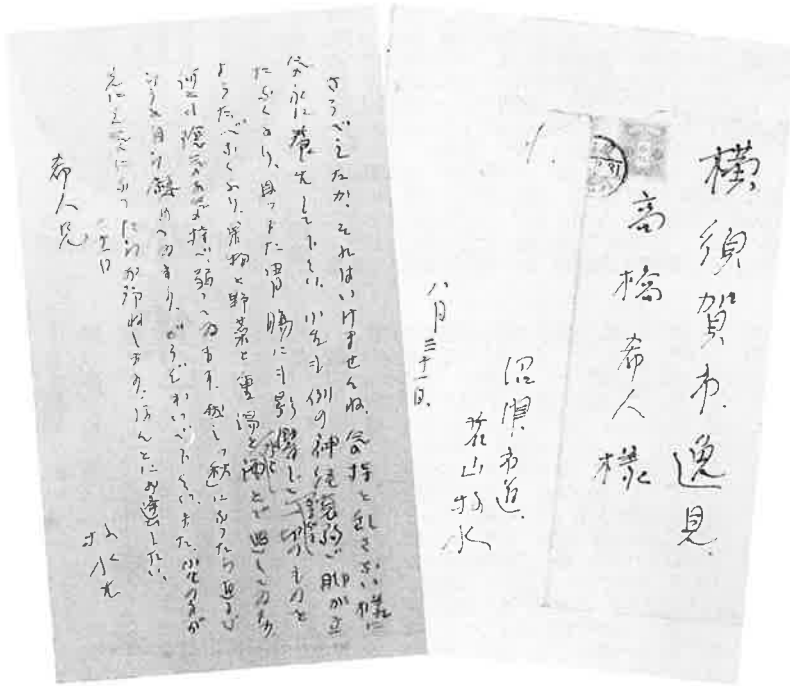
最後の手紙

さうでしたか。それはいけませんね。気持を乱さない様に気永に養生して下さい。小生も例の神経衰弱で脚が立たなくなり、且つまた胃腸にも影響してなまぐさ一切のものをようたべなくなり、果物と野菜と重湯と水と酒とで過してゐます。何とも陰気な気持で、弱つてゐます。然し「秋」になったら直るだらうと自ら慰めてゐます。どうぞおい下さい。また、小生の方が先に元氣になったらお訪ねします。ほんとにお逢ひしたい。

希人兄

三十一日

牧水生



この文章は、牧水が死の十七日前、昭和三年八月三十一日、社友の高橋希人氏宛に書き送ったペン書き返信の文面である。牧水記念館展示室の入口に近い壁に飾られている。これを読む度にいつも思うことだが、人は自分の一生の終わりの時にも、予感らしきものは全くないのかということである。「何とも陰気な気持」で弱っていると書いてはいるが、秋には元氣になれるものと明快に信じている様子である。四十三歳の男には、死は予想外の出来事で、実感としてはその影さえも見ることはなく、はるかな縁遠いものだったのかもしれない。

例えばこういうことがある。死の前日の十六日午後、急を聞いて駆けつけた改造社の山本社長と、牧水はこれからの仕事の打ち合わせをしているのだ。予定されている全集発行の計画について「大悟法にも手伝わせて出来るだけ早くまとめますから」などと熱っぽく語りかけていたという。喜志子夫人はこのことに関し追悼記「病床に待して」の結びのところで、次のように述べている。

「私は私の一番大切な人に死なれた。そして「遺言」といふものを残されなかった。然し私はそれを慫慂ものではない。それでいゝのだ。すべてそれでいゝのだと思つてゐる。逝つた人は或ひは死の自覚が無かつたかも知れない。又あつたのかも知れない。彼の人を知つてゐた私には、すべてあのみまよふよかつたのだ。それでいいのだと思つてゐる。南無阿彌陀佛」

牧水最後の手紙は、今は容易に手に入りにくい歌集「獨り歌へる」や鉄瓶、茶碗、「幾山河」の半切などと一緒に、目黒自由が丘の高橋邸で、直接希人氏から手渡されたものだ。昭和六十二年三月雛の日であった。私はその日、市役所社会教育課の担当伊沢康行君たちと、ライトパンを運転して行つた。氏はその頃すでに病気がちだった。我々の訪問を楽しみにして、「二時間も前から洋服に着替えて待ちました」という夫人の言葉が、今も耳元に聞こえている。

この日我々は二時間にわたり旧知の如く歓談した。別れ際に、氏ははつきりと言われた。「この資料は今はお貸しするわけだが、私が死んだら自動的に記念館に寄贈したことにして下さい」と。それから僅か二ヵ月後の五月七日、私は希人氏の告別式に参列すべく、川口社会教育課長と二人、目黒実相会館に向かったのである。

(上田治史)

自選歌集 「若山牧水集」

須永秀生

（沼津市若山牧水記念館 理事）

若山牧水の歌集と言えば、まず浮かぶのが、出世歌集とも言うべき『別離』であろう。しかし、『別離』

には何の評価も受けず、牧水を落胆させただけであつた。

は第三歌集で、第一歌集は明治四十一年発行の『海の聲』である。新潮社という出版社から薦められての出版だったが、途中で出版社が倒産、結果的に自費出版となつてしまつた（発行所は生命社となつて

最初に書いたように、牧水の名を高めたのは第三歌集『別離』で、この歌集は明治四十三年四月東京の東雲堂から発行された。東雲堂書店は大手の出版社で、その年の三月に詩歌総合雑誌の『創作』を華々しく発行し、その編集者として牧水の名が有名になつたことと相俟つて、『別離』は一躍歌壇の話題となり、その前月歌集『収穫』を出した前田夕暮とともに、歌壇に「牧水夕暮時代」が現出したのである。

カッタ風に入り、土岐善麿の筆で『海の聲』と金箔で押された豪華な歌集で、一冊五十銭。しかし、無名の歌人の処女歌集が売れるわけがなく、出版部数七百部の半数近くが売れ残つてしまつたという。翌春、金に困つた牧水は残本をリヤカーに積んで近くの古本屋に売つたが、一冊八銭にしかならなかつたと伝えられている。私は昨年秋田の角館の平福百穂記念館に行つて、画伯の扱つた白秋や他の多くの作品集の装丁本を見てきたのだが、『海の聲』だけがなかつた。『海の聲』は現在手に入りにくいのが、幸い若山牧水記念館にはあるので、興味のある方はご覧いただきたい。

『別離』は、恋人園田小枝子との愛の哀歌を歌い上げた作品集だが、前記の第一歌集『海の聲』、第二歌集『獨り歌へる』の二歌集にその後の作品を合わせた歌集で、その時点で若山牧水の全歌集とも言えたのである。したがつて、初期の秀歌と言われる白鳥はかなしからずや空の青海のあをにも染まらずだよふ

第二歌集『獨り歌へる』は、明治四十三年一月名古屋の八乙女会から発行。菊判百四十頁、歌数五百五十一首、定価四十五銭。八乙女会は名古屋の青年達のグループで、資力も宣伝力もなく、しかも二百部弱しか出版されなかつたため、この歌集も世間か

山を見よ山に日は照る海を見よ海に日は照るいざぐ唇を君
けふもまたこのころの鉦をうち鳴しうち鳴しつつかくがれて行く
幾山河越えさきゆかば寂しさのはてなむ國ぞ今日も旅ゆく
いざ行かむ行きてまだ見ぬ山を見むこのさびしさに君は耐ふるや

おのづから熟みて木の實も地に落ちぬ戀のきはみにいつか來にけむ
山奥にひとり獸の死ぬるよりさびしからずや戀の終りは
山ねむる山のふもとに海ねむるかなしき春の國を旅ゆく
春白晝この港に寄りもせず岬を過ぎて行く船のあり

といった作品が載せられていて、その透明なさややかな叙情性は世の青年達の心を大きく捉えたのであつた。



第二歌集『獨り歌へる』は、明治四十三年一月名古屋の八乙女会から発行。菊判百四十頁、歌数五百五十一首、定価四十五銭。八乙女会は名古屋の青年達のグループで、資力も宣伝力もなく、しかも二百部弱しか出版されなかつたため、この歌集も世間か

山を見よ山に日は照る海を見よ海に日は照るいざぐ唇を君
けふもまたこのころの鉦をうち鳴しうち鳴しつつかくがれて行く
幾山河越えさきゆかば寂しさのはてなむ國ぞ今日も旅ゆく
いざ行かむ行きてまだ見ぬ山を見むこのさびしさに君は耐ふるや



元沼津市長 長倉宣一氏

今年(平成八年)になって、牧水の高弟の一人である沼津市長になった長倉宣一氏のお宅から、貴重な牧水関係の書籍、文書などを若山牧水記念館にご寄贈頂いた。その中に、牧水の第七歌集『秋風の歌』のほか、『牧水歌集』、『牧水歌集(2)』、『若山牧水歌集』、『若山牧水集』が含まれていた。『牧水歌集』は、昭和八年改造社からの刊行で、改造社文庫第二部第三三七篇とあり、菊半裁判三一九頁、『海の聲・獨り歌へる・別離』の三歌集の合同歌集。『牧水歌集(2)』は、昭和九年刊行の同じく改造社文庫で、第二部第二四七篇、菊半裁判三九四頁、『路上・死か藝術か・みなかみ』の三歌集の中からの選集である。『若山牧水歌集』は、鎌倉書房からの刊行で、昭和二十二年発行。戦後の物資不足の中でよくこれだけの歌集を出したと感心させられる。二五〇頁の四六判の本で、当時の世相そのままに更紙様の荒い紙で、何となくかつてのカストリ雑誌を思わせる。限定三〇〇部の一三一番とあり、貴重な資料である。

ここでとりわけ話題にしたいのは、『若山牧水集』で、他の本が昭和になって、牧水の死後、喜志子さんや大悟法利雄氏によって編まれたのに対して、この歌集は大正五年十一月初刊で、初版本は若山牧水記念館にあるが、今回寄贈された本は、第十四版で、大正十三年四月の発行のものである。両者を比較すると、装丁から全て同一の物だが、大きな違いは、初版本の定価が一円二十銭であるのに対し、大正十三年の十四版は一円二十銭となっている。関東大地震が大正十二年だから、大震災を挟んでの物価上昇のせいかもしれない。

それはともかくとして、大正四年から大正七年にかけて、牧水は歌集以外に次々と書物を刊行している。大正四年植竹書院から自選歌集『行人行歌』、大正五年六月天弦堂書店から散文集『旅とふる里』を、十一月新潮社から自選歌集『若山牧水集』を刊行している。前出の歌集がこれである。この歌集は、「別離・路上・死か藝術か・みなかみ・秋風の歌・砂丘・朝の歌」から選んだもので、大正五年から十三年までに十四版を重ねたことからも分かるように、まさにロングベストセラーだったのであろう。



歌集の冒頭は「朝の歌」から始まる。その第一首は、残雪行として

停車場の柱時計を仰ぎつつ現なや朝のストーヴの椅子に
仙台駅

が配せられている。

牧水は、喜志子さんの病が快方に向かい、岬さんの誕生で信州から義妹の桐子さん(後の長谷川銀作氏夫人)が手伝いに来ているのを幸いに、念願の東北への旅に出かける。大正五年三月十四日東京を出立、仙台を皮切りに、塩釜、松島に遊び、十六日から数日を盛岡の菊池野菊方に、青森では十日余り藤野草明宅に滞在する。その後、五所川原を経て、北津軽郡松島村の加藤東籬方に逗留、この地の和田山蘭の生家を訪ね、さらに大鰐温泉、板留温泉、秋田飯坂温泉、福島と回って五月一日に帰宅している。少し作品を抜く。

塩釜の入江の水はりはりと裂きて出づれば松島
の見ゆ
塩釜

遠山に消えつつ残るはだら雪雨のごときを見る
眞畫かな
盛岡古城址



やと握るその手この手のいづれみな大きからぬ
なき青森人よ 青森駅

ひつそりと馬乗り入るる津軽野の五所川原町は
雪小止みせり

櫓の鈴戸の面に聞ゆ旅なれや津軽の國の春のあ
けほの 五所川原町

堅雪の畦道ゆけば津軽野の名残の雁か遠空に見
ゆ 津軽平野

かたくりの若芽摘まむとはたら雪片岡野邊にけ
ふ兒等ぞ見ゆ 南津軽板留温泉

鶺鴒繡眼兒燕山雀啼きしきり櫻はいまだ開かざ
るなり 秋田市千秋公園

作品はこの後も旅を重ねるように歌い継がれてい
く。

『若山牧水集』の巻末には、『路上』から、

海底に眼のなき魚の棲むといふ眼のなき魚の戀
しかりけり

かたはらに秋ぐさの花のかたるらくほろびしも
のはなつかしきかな

白玉の齒にしみとほる秋の夜の酒はしづかに飲
むべかりけり

多摩川の砂にたんぽぽ咲くころはわれにもおも
ふひとのあれかし

など四十四首が、『別離』からは、

ああ接吻海そのままに日はゆかず鳥翔ひながら
死せ果てよいま

ともすれば君口無しになりたまふ海な眺めそ海
にとられむ

など四十八首が抄出されている。
興味のある方はぜひ本歌集を手にとつてご覧いた
だきたい。

名古屋市立宮中学校を訪ねて 磯崎 剛

昨年(平成七年)十月下旬、名古屋市熱田区
の宮中学校を訪ねました。この学校に牧水歌碑

があることは、沼津市若山牧水記念館の展示な
どで承知していました。ただ、ここには、歌碑
だけでなく、文学の小径や資料室もあるという
ことなので足を運んでみました。

牧水歌碑は、正門を入ると右側の築山に建っ
ていました。この歌碑は、牧水がこの熱田の地
を何度となく訪れたのを縁に、門人たちによつ
て昭和十一年十一月二十二日に建立されたもの
です。

うす紅に葉はいちはやく萌えいでて咲かむ
とすなり山ざくら花

と刻まれている歌は、同校の校歌の一節にもな
っています。

資料室は一般教室を改装して使用しています
が、同校には牧水歌碑のほか芭蕉の句碑もあり
ともに資料が展示されています。年表がとても
分かりやすく作られていたのが印象的でした。

「展示品などはまだ不足気味です。」と、案内を
してくださった教頭先生が話されました。

同校が建っている場所で、江戸時代から数多
くの句会や歌会が開かれており、牧水も度々こ
の歌会に参加していたそうです。そんな縁もあ
つて、昭和二十七年から毎年牧水の命日である
九月十七日前後に「牧水忌短歌会」が催され、
全校生徒が短歌をつくり牧水を偲んで
います。

宮中学校では、貴重な文化資源を本
当に有効に活用しているなあと思いつ
つ、同校を後にしました。

沼津市にも、校庭にはなくとも、校
区内に牧水歌碑がある学校があります。
牧水が愛し、牧水の終焉の地となった
沼津。歌人牧水という優れた文化資源
をぜひとも様々な形で活かしていただ
けたらと思います。

(社)沼津牧水会會員
沼津郵便局勤務

